

## 初雪

先日(18日)、札幌にも初雪が降りました。嵐のように風が吹き荒れ、雷が鳴り、みぞれが窓を打っていましたが、それがとうとう雪になりました。

みぞれが雪に変わるさまを見ながら、ふとこんな歌を思い出しました。

「風雑(まじ)へ 雨降る夜(よ)の 雨雑へ 雪降る夜は術(すべ)もなく 寒くし  
あれば 堅塩(かたしお)を 取りつづしろひ 糟(かす)湯(ゆ)酒(さけ) うち啜  
ろひて 咳(しはふ)かひ 鼻(び)しびしに しかとあらぬ 鬚(かき)撫(な)でて 我(あ  
れ)を除(お)きて 人は在(あ)じと 誇(たか)ろへど 寒くしあれば 麻(あさ)衾(ふすま)  
引き被(お)り・・・(日本古典文学大系 萬葉集二)」

この歌は山上憶良の貧窮問答の歌で、当時の厳しい現実がひしひしと伝わってきます。同時に、非常にリアルな感じで耳に残るのは、今日の不安な社会情勢のせいかも知れません。

山上憶良程には悲嘆に暮れている訳ではありませんが、今年という年は、政治も経済も大変な1年だったと思います。昨年の今頃は、東日本大震災の記憶が生々しく残っており、被災地の方々はどのようにして年を越すのかと心配していました。残念ながら、復興対策はなかなか思うように進んでいませんが、被災地の人々がしぶとく頑張っている姿には勇気づけられます。

さて、札幌市内の初雪は昨年よりも4日遅く、平年と比べると21日も遅いとの事です。それでも、季節は巡って、着実に冬まっしぐらです。ついこの間まで、暑い暑いといっていたのがウソのようです。

今年の冬は電力不足が懸念されていますが、厳冬期に電気がストップしたら大変な事になります。多分、家の中は冷蔵庫ならぬ冷凍庫状態になってしまうでしょう。考えるだけでもぞっとします。そこで、我が家でもポータブルのストーブを購入しました。まだ箱に入ったままで、使用せずに済めばそれに越したことはないのですが、本当にささやかな防衛策です。

昨年は岩見沢が記録的な大雪でした。今年も大雪の気配がありますが、どうでしょうか。

私が住んでいる西区内は比較的雪が少なく過ごしやすいのですが、今年は昨年の反動で大雪になるのではと心配になります。

もっとも札幌から雪を取ってしまうと、生活するには楽だと思いますが、それでは札幌らしさがなくなってしまいます。何故なら、札幌は雪が似合う大都会であり、市民の皆さんは、長い時間をかけて雪と調和しながら生活し、雪を楽しむ術を身に付けて来ました。北国の人達にとっては、雪はただ辛いだけの存在ではありません。

小林一茶の句に

初雪や 一二三四 五六人

というのがあります。

朝起きたら一面の雪景色、あちこちの家々から一斉に子ども達が集まってきてはしゃいでいる、そんな様子が目に浮かぶようです。

雪は時に、私たちに大きな災難をもたらしますが、同時に、日本が瑞穂の国として豊かな水にめぐまれているのは、冬に降る雪のお陰でもあります。

「雪の結晶は、天から送られたてがみであるということが出来る。そしてその中の文句は結晶の形及び模様という暗号で書かれている。」といったのは、中谷宇吉郎博士です（中谷宇吉郎著「雪」から）。中谷博士は、その雪に見入られ、雪の研究に生涯を捧げた人です。中谷博士は、1962年に亡くなりましたから、今年は没後50年という事になります。

中谷博士は、雪の研究に関して、著書「雪」の中で「一口に『雪が降る』とか『雪は六花の形をしている』とかいってすましていられる人にとっては、私の今まで述べた（雪についての）話は頗る無用のことに属するであろう。しかし、自然の色々な現象の正体を究めようとする人にとっては、雪という我国にとって重大な意義をもつ自然現象の一つを、過去何千年かの間の人々と同じような見方で、何時迄も見ていることは余り望ましい事ではない。（中略）日常眼前に見る事態の悉くが、究めれば必ず深く尋ねるに値するものであり、究めて初めてそのものを十分に利用することも出来、又もし災害を与えるものであればその災害を防ぐことも出来るのである。それ故に出来るだけ多くの人が、まず自分の周囲に起こっている自然現象に関心を持ち、そしてそこから一歩でもその真実の姿を見るために努力することは無益な事ではない。」と述べています。

この中谷博士の言葉は、「周囲の状況を十年一日のように、ただ見続けているだけではないのか」という、私への重い問い掛けでもあると、新雪を踏みしめながら感じたところです。（塾頭：吉田 洋一）